

Mountaineering Ski

1999.5/8 ~ 9

天候・・・晴れ



春遠し
白い山並み
五月晴れ

White Mountain

白山



昨日に白山観光協会に電話を入れて確認した所、地元の人からの要望があつてか、どうも今年からは別当出合までの車道は雪退けをされていてここまで入れるようになっている。そのおかげでこの5月の雪山というのに何と車の多いことが、・・・昨年の雪の少ない時よりも多く感じられる。ザッと見て50台は入山しているだろう。一昨年に入山した時はアスファルトの5kmの道のりを板とブーツ共に25kgの重装備を担いで登ったものだが・・・だからこのシーズンはまだまだ人は少なかったのだが・・・。しかし、この5kmの距離を歩かなくていいのは非常に大助かりである。入山者も登山者、テレマーカー、スキーヤーと三種算用である。それにしても、この土日は先週の北アルプス同様に、高気圧がどっぴりと日本列島に停滞していて2日ともピーカン日和である。

5/8 晴れ

9:30 19度、1260m。白山の別当出合スタート。

ここから見える山並みも去年とは大違いで雪がベツタリと付いている。装備は山スキー装備一式、シール、クトー、アイゼンをザック固定でザッと20kgオーバーを背負ってワクワクしながら登って行く。

10:16 18度、第一林道に到着。

雪はここらあたりからベツタリと付いている。

10:37 15度、1600m、装備変更でスキー引っ張り。



明日はここまで滑れるのを確認、山頂付近の2650mからザッと高低差1000m、距離にして4kmほどの大滑降である。

もうここら辺からは完全な雪山なのでスキーをザックより降ろして「引っ張り」にする。このスキー引っ張りは、どこの山に行ってもまず見かけることが少ない、みんなは最後までザック固定で担いで登っている。絶対にこの引っ張りのほうがラクなのに・・・。

「雪登り

気温低い

汗流れ」

11:35 14度、1960m、仁の助無人小屋到着、大休止。

ここまでの2時間は急登急登の連続である。夏山はジグザクにルートが確保されているのだが、いざ雪山となると直登なので心拍は180を回っているくらいである。

小屋の屋根にはいつもの事ながら数人がくつろいでいる、当然に小屋は雪の下である。20人ほどの中学生が先生に連れそわれてワイワイ言いながら急斜面を尻滑りで滑降している、ここら辺の子供は大変元気である。

ここからは弥陀ヶ原方面に行く急斜面の直登コースもあるが(この斜面の滑降は来年の楽しみにとっておく)、白山名物の「南龍ヶ馬場」、「別山の山並み」の非常に美しい景色が見えるのでエコーラインのトラバースコースを選んで登って行くことにする。しかし、雪が多い・・・



私の経験する白山では最高である。

13:00 9度、2200m。エコーラインの中腹で装備変更でシール装着。
ここから見渡す別山方面は本当に素晴らしいものである。山スキーヤーが6人ほど南竜の無人小屋から出てきている。きっとあの小屋は今日はもう満杯であろう。

「見るからに

吸い込まれそう

万才谷」

13:25 2305m。白山の超急斜面の美しい万才谷が見えてきた。
ホントにすごい谷である、ここから見ても90度近くに見える。加藤さんが滑り出しは下が見えないから気合いがいると言っていたのを思い出す。しかし、よく見ると一本のスキーのトレースが付いているの



がわかる、とんでも無いヤツがやはりいるもんだ、と思う。

私も今年は滑ってやると意気込んでいたのだが、やはりこの急斜面を目の当たりにしては戦意消失してしまった。もしエッジを食われれば谷底にまっしぐらなのだから・・・。

13:50 5度、2450m。室堂山荘到着。

やはりものすごい雪の量である。木の鳥居が1mほどしか見えない。早速素泊まりの予約をする、4400円。

今年は、一昨年に泊まった「白山荘」ではなく、「御前荘」であった。白山荘は非常にシックな作りで日当たり最高で気に入っていたのだが、この小屋は今年から事務所になっていた。と言うのも室堂小屋を3年かけて建て直すとの事、他の山小屋に比べればまだまだ綺麗な小屋なのに・・・、この白山はすべてが美しいのが歌い文句であるが、一体こういった予算が出ているのであろうか？と首を傾げてしまう。

「山小屋に
入れどそこは
やはり冬」

御前荘は雪の下に埋まっています非常に寒い、そして暗い！の一言である、当然にこの時間帯はまだ外のほうが暖かい。一部屋だけが解放で10人ほどの宿泊客である。白山はこの時期の泊まりでも毛布二枚のみなのでシュラフやシュラフカバーは必要である。

14:30 くつろいで腹ごしらえをした後、山頂目指してシール登行して一本滑ることにする。ザックを置いてきているので急斜面でも快適である。

15:00 3度。山頂付近のコルにスキーをデポして山頂まで登山である。

やはり山頂付近は強風にあおられて雪も吹き飛んでしまうのであろう、ガレ場である。

山頂2702mから見える360度の大パノラマを期待していた(ここから見渡す穂高連峰は最高)のだが、天候があやぶくなって来て、下からガスが立ちこめて来た。アツという間に視界が10mほどになってしまう。

コンパスを確認しながらスキーデポ地点まで戻り、ここからガスの中からうっすらと見える室堂山荘めがけての大滑降開始である。日々の好天に恵まれて雪質は重い湿質で板が思うようにコントロール出来



ない、しかし、この斜面を滑れる楽しさを思えばすべての面で感謝の気持ちで一杯である。一気に滑ってしまうのはもったいないので要所要所で山頂を見上げてはまた滑るといったように滑降する。

17:05 山小屋の入り口の土間で早速に夕食の準備に取りかかることにする。

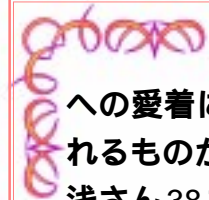
雪の中に冷やしておいた缶ビールで今日一日に感謝の乾杯をして、心地よく喉

中にそそぎ込んだ。このビールはどこよりも最高のうまさである。夕食は恒例にジフィーズランチである。しかし、最近はこれにも凝ってきて家でモロヘイヤを天日で干した物、乾燥ワカメ、干し椎茸、と豪華にブレンドするので最高の贅沢である。

「山小屋で
酒酌み交わす

「出合あれ」

10人ほどの宿泊客は、登山者、山スキーヤー、カメラマン、XCスキーヤー、と多彩な顔ぶれである。その中でもXCスキーヤーには、非常に興味を引かれて、夕食を終えてウィスキータイムに入るところコンタクトを取って一緒に飲み始めた。なんでこんな白山にまでXCスキーを?、と言っても私の使用しているXCスキーとは雲泥の違いで完全なフリースタイルの競技用のものである(当然にウロコは付いていない)。色々話し込んでいるうちに一度この白山の弥陀ヶ原で思い切り滑ってみたかった、そしてここで夕日と朝日を浴びて走りたかったと



言う彼の自然への愛着には関心させられるものがあった。彼(湯浅さん38才)は、宝塚から堺まで通っている中学校の養護担当の先生なのだ。XCは大学から今に至って今はバイアスロンに挑戦していると言っていた。私には到底かけ離れた世界である。



「白山も

驚きあらわ

XC スキー」

また、カメラマンにはすごいカメラですねえ~、と言って「素晴らしい写真を撮って山溪に出しているのですか?」と聞いたところ、何と「この68のカメラは山溪で優勝してもらったものです」と言っていた。いやはや、この度の宿泊客はツワモノぞろいである。やはり山小屋はこういった一晩のドラマがあるから楽しいものである。

20:00 消灯。ウィスキーもほろ良く体中に蓄積されて心地よい眠りについた。

23頃にトイレに起きて外に出て素晴らしい夜空を見上げようとしたが、何とガスに見舞われて視界は3mほどで小屋から離れることは出来ない・・・しかたなく3m範囲で用を足した。



5/9 晴れ

5:30 起床、0度。外はまだガスっている。

朝食の用意をしていると、湯浅さんがちょっと朝日を浴びて来ますと言ってゴク細のXCを担いで滑って行った、それを見届けたがホントにアツという間に朝日に吸い込まれて行った。「すごい!」の一言である、なんという速さなのか・・・。

7:40 ガスも見事に晴れ渡って快晴になってきた。

朝食を済ませてパッキングも完了して、さぁシールにクトーを装着して山頂近くのコルまで登ろうとした時、やっと彼がトレーニングを済ませて帰ってきた。何と今から登ろうとしているコルまで登って滑ってきたと言うからこれまた驚きである、エッジも付いていないのに、こんなフィルムクラスト状態の急斜面をよく滑ってこれたものだと・・・さすがプロ級の腕である。

8:30 5度、2610m、コルに到着。

クトーが堅い雪に食い込んで心地よく登れた。前のパーティーはクトー無しなので、幾度となく踏ん張りが効かずに苦闘していた。

ここからは、シール、クトーも外し滑り一本やりである。前方に見える大汝峰は今までになくすごい雪が積もっていて猛々しい雰囲気威圧している。

「雪面に

エッジを刻み

滑り込む」

滑るルートは滑り出しこそオーバーハングになっているが、それを乗り越えれば後は楽しく滑れるルートである。雪も朝一番なので少々アイスバーン気味ではあるが快適そのものである。大自然のフィールドを朝日を浴びての独占状態で滑降するのだから気分は爽快極まりない。

御前峰と大汝峰のコルから小さなピークを取り巻いて滑り込み、スキー引っ張りで弥陀ヶ原まで登り返しエコーライン方面に滑り込んで行くといった大変ダイナミックで素晴らしいコースである。

9:15 エコーラインに到着。

ふと、前の別山方面のつずら折れの道の急な斜面を見ると何と、やはり昨日の南竜無人小屋に泊まっていた5～6人組が空身で滑ったのであろう、上手なシュプールが刻んであった。私もいずれは滑ってみたいフィールドである。

雪が緩んでいるもののエコーラインも難なく滑り終え、仁の助無人小屋の上部までトラバースである。

そこで、またまた非常に懐かしい人物に出会う、本当にこの度は多くの出会いがあるものである。その人は私の一級先輩で高校時代の剣道部の人であった、私が柔道部で隣り合わせの道場なので記憶にあった。当然彼も覚えてくれていた。出会いとは摩訶不思議なものである。彼は登り、私は下山なので軽く「じゃ、また。」と言って別れた。

素晴らしい斜面もあつと言う間に滑り終え、それからは究極の山スキーの始まりである。何処をどう滑ろうかと一瞬で判断しながら、木立の間をすり抜けて滑るアウトドア究極の遊びである。

10:45 1575m。無事にスキー最終地点まで滑り終えスキーをザックに固定。

やはり両足の太股がパンパンで心地よい筋肉痛である。天気は非常によく下に降りて行くのが非常にもったいないくらいである。

「下山道

雪解け待たず

花ざかり」

11:20 18度。あつと言う間に登山道に雪も無くなり、よく見ると道脇には春の芽吹きの高山植物の

お出ましである。我も我もと肩を寄せ合って暖かい日光をサンサンと浴びて風に揺られて何かをささやいているようにも見える。きっと、「これからは私たちの出番だからまた夏においで、」と言っているであろう。私も「もちろん来るよ！」と言ってこの素晴らしい白山をあとにした。



この素晴らしい白山に感謝、

そしてカンパイ！

